

シャルル・バイイの言表行為理論における 「私」の構造

江口 祥光

【0】序

語用論と呼ばれる分野が、記号学・言語学を横断しながらその研究領域を展開している。この「語用論」という用語は、チャールズ・モリスが1938年『記号理論の基礎^①』で定義した以下の言葉に由来する。

記号過程^{セミオシス}という三項関係の三個の相関項（記号媒体・指示対象・解釈者）から、多くの別の二項関係を研究対象として取り出せる。（…）研究の主題を記号と解釈者との関係に、置くことができる。この（記号と解釈者との）関係を記号過程の語用論的次元と呼び、「Dp」という記号で表す。そしてこの次元の研究を語用論と名付ける(FTS, p.6)^②。

つまり、語用論とは、「記号」と「それをを用いる主体」との「関係」を研究する学であると言えるだろう。そしてモリス以降、語用論は、オースティン、サールの「スピーチ・アクト理論」、グライスの「コミュニケーション理論」、さらには、スペルベル、ウィルソンの「関連性理論」などを組み込み、あるいはそれらを土台にして著しい進展を遂げつつけている。フランスにおけるデュクロの「*argumentation*」の提唱も、この語用論の一種と考えられるだろう。こうした語用論研究の分野にあって、その先駆者の1人に、文の意味論的な構造を言表行為理論として展開したシャルル・バイイが挙げられる。

本稿は、このバイイの言表行為理論を批判的に検討することによって、記号とその解釈者（記号を用いる主体）との根源的およびよべるような関係を明らかにしようと試みる。このことは、記号と主体の関係を対象とする学である語用論

の理論的基盤をより堅固なものとするだろう。

バイイは、「様態性」を巡る議論で有名だが、1932年出版の『一般言語学とフランス言語学^①』の中で「言表行為の一般理論」という章を設け、そこで「文」に関する議論を展開している。バイイがこの議論で提示している言表行為理論を我々は二つに分けて考えることが可能だ。一つは、文を論理的に分析し、文を構成する二つの要素を導くことによって、文の構造を明らかにしているものであり、もう一つは、この文の二要素に更に先立つ要素として、文を発する主体を導入しているものである。このバイイの理論の中には、記号とそれを使用する主体という考え方が存在しており、そこに語用論的な発想を看取することができるだろう。だが同時に、この両者（記号とそれをを用いる主体）の関係がどのような構造をなしているのかということについて、明快な説明がなされているとは言い難い。そこで、この両者の関係を明らかにする必要性が生じることとなる。バイイの言表行為理論に検討を加えている末永(1998)は、バイイの両理論において共に、一人称単数代名詞「私」が重要な役割を果たしていることを指摘し、言表主体、つまり記号を用いる者が常に「私」であることを示している。この末永のバイイ解釈を検討することにより、われわれは、単一的な意味論的価値を担うものとして構成されているかのようにみえる記号「私」が、いくつかの異なる意味論的価値を担っていることを明らかにすることができ、そこから更に、この異なる意味論的価値を担った記号「私」の検証を通じて、記号とそれをを用いる主体とのある根源的な関係を明らかにすることができるだろう。

以上のような観点から、本稿は以下の順序で論じてゆく。

- I. まず、バイイが『一般言語学とフランス言語学』の中で展開した言表行為理論の順序に沿って、我々が第一理論と呼ぶ「文の理論」を確認してゆくことにする。続いて、この「文の理論」に対して、末永が提出した解釈を辿ってゆく。ここにおいて、バイイの「文の理論」が、言語記号「私」へと収斂してゆく様を確認する。
- II. 次に、バイイの第二理論を取り上げ、この理論においてもまた、言語記号「私」が、重要な位置を占めていることを確認する。再び、末永の議論を参照し、そこから記号「私」が、複数の意味論的価値を担っていることを

明らかにする。

- Ⅲ. 上記Ⅰ、Ⅱの作業を通じて明らかとなった記号「私」が担う複数の意味論的価値の中から、主体と記号との間にある根源的と呼べるような関係を取り上げ、その構造を明らかにする。

【Ⅰ】バイイの第一理論と末永によるその解釈

バイイの言表行為理論を確認し、それに対する末永の解釈を辿ってゆく。この過程によって、「私」という記号が、言表の意味論的な構造において重要な位置を占めることが明らかとなる。

では、バイイの第一理論がどのようなものか確認してゆこう。バイイは『一般言語学とフランス言語学』の第一部、第一篇において「言表行為の一般理論」を構築することを目指し、次のように述べている。

さて、ことばの領域へと赴き、思考の伝達が帯びうるもっとも論理的な形式が何かを問うてみよう。それは、もちろん、感覚、記憶、または想像からうけた表象と、主体がそれを扱う心的操作を明確に区別する形式である。(LG, p.36)

引用文冒頭にある思考の伝達とは、何かしらの考えや、感じたこと等を他者に伝えるために、言葉として表現することだと考えられる。この時、バイイによれば発話される言葉は、「主体の心的操作⁴⁾」(事実判断、価値判断、意志・意欲)と、「感覚、記憶、または想像からうけた表象」とに分けられるということになる。以下、続けてバイイによるこの二つの文の要素に対する説明を確認してゆく。

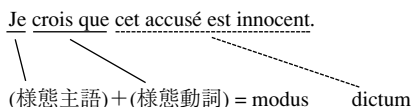
(明示的に示された文は、従って2つの部分を含んでいる)：1つは表象(たとえば<雨>、<治癒>)を構成する過程の相関項である；われわれは論理学者にならって、これを<事態⁵⁾>(dictum)と名づけよう。もう1つは文の主要部をふくみ、これが無いと文は存在しない。すなわち思考主体の操作と相関的な様態性(modalité)の表現である。様態性は、論理的、分析的表現として、<様態動詞>[···]とその主語、すなわち<様態主語>をもつ；両者は事態の相補項であ

る<様態> (modus) を構成する。(Ibid., p.36)

以上の説明から、バイイの示した文に内在する二つの要素を次のようにまとめることができるだろう。文は、二つの部分から成り、一つ目は、文の主語と、文の主語が表している言表主体、つまり記号を用いる主体の態度を表す部分から成り、これがmodusと呼ばれる。二つ目は、「感覚、記憶、または想像からうけた表象」、言い換えれば主体が世界から受け取る「表象」を「構成する過程」を表す要素としてのdictumである。つまり、modusが主体の世界に対する態度であるとするれば、dictumは世界に起こる出来事から受けた表象の描写であると考えられる。バイイはこれらの関係の具体例を挙げているのでそれをみておこう。

さて、これから論理的に構成された文の辞項—つまり様態主語、様態動詞および事態であるが—これらを結びつける関係を決定してみよう。次のような文、Je crois que cet accusé est innocent.は、ある思考主体 (moi) がある思考行為 (croire) をある表象(l'innocence d'un accusé)にたいしておこなっていることを示している。(Ibid., p.38)

バイイが上記引用文で示している例を図式化すると次のようになる。



バイイの考える文においては、思考主体 (例文ではje) とその思考主体の考え (判断等であり、例文ではcroire)、そしてその考え (判断等) が何に対してのものであるか、という対象(cet accusé est innocentにあたる)が要請される。そして、思考主体とその考え (判断等) をmodusと、その思考主体の考えが及ぶ出来事、つまり思考主体が「何かに対して」思考するところの「何か」にあたる部分をdictumとバイイは名付け、具体例と共に示しているのである。

このバイイの文の分割に対して、次のような指摘が可能である。それは、日

常の対話活動において、modusが明示的に示されていない文がしばしば見受けられるのではないか、という指摘である。上記の例文を用いて示すなら、modusに該当するJe crois queを文から取り去り、modusの欠けたdictumだけからなる文を次のように想定することが可能だ。

Cet accusé est innocent. 「この被告は無実だ。」

しかし、このようにmodusが欠け、dictumだけから構成されているように見える文であったとしても、論理的に考えれば実は思考主体とその判断を要請するということをバイイは次の例によって示している。

- (a) Il pleut = « Je constate qu'il pleut »
「雨が降っている。」 = «私は雨が降っていることを確認する»
- (b) Sortez ! = « Je veux que vous sortiez »
「出て行け！」 = «私はあなたが出て行くことを望む»
- (c) Vous seriez heureux (si vous vous contentiez de peu)
= « Je me représente en imagination votre bonheur »
「あなたは幸福でしょう。」 (もしあなたがわずかなことで満足するなら)
= «私はあなたが幸福だと想像する»
- (d) Cet étourdi aura manqué son train = « Il est probable, je suppose qu'il a... »
「このうっかり者は列車に乗り遅れるでしょう。」
= «恐らく、私は…と推測する»
- (e) Tu aimeras ton prochain = « Dieu ordonne que... ».
「汝の隣人を愛せよ。」 = «神は…と命じる» (Ibid., p.46)

最初の例文(a) Il pleut.と、その展開例Je constate qu'il pleut.を考えてみよう。Il pleut.という世界内での出来事を描写している、そして思考主体とその判断の無い、一見dictumだけから成り立っているように見える文は、実はそれを発する主体=je、そしてその主体の出来事に対する判断=constateという要素を暗黙裡に前提する。Il pleutに続く例文においても事情は同じだ。つまり、発言を行うということは、必然的にそれを行う主体とその判断を含蓄しているということになる。そこで、バイイの文の理論をまとめておこう。バイイによれば文

を論理的に構成している要素は、思考主体、思考主体の判断、そして、思考主体の判断が対象とする表象である。この三つの要素のうち、前二者がmodusを、最後の一つがdictumを構成する。この際、注意しておきたいのは、例文(e)：Tu aimeras...と、その展開例：« Dieu ordonne que... »に見られる分析である。この分析では、modusの主語はDieuという三人称になっており、ここからバイイにとって、modusの主語は一人称であろうと三人称であろうと、そしてまた単数であろうと複数であろうと支障をきたさないということが推測される。これがバイイの示した言表行為の第一理論、つまりmodus、dictumという要素への言表の分割である。

では、ここからこのバイイの第一理論に対する、末永の捉えなおしを辿ってゆきたい。今確認したように、バイイの構想する文要素modusはその思考主体が誰であっても良い。つまり一人称であろうと三人称であろうとどちらでも良いということだ。これに対して末永は「MODUSでは主語は一人称単数代名詞「je私」に絞られる。」(1998, p.37)⁶⁾と言う。その説明は以下の通りだ。

Il regrette qu'elle ne soit pas là. は、この文を言表した主体自身の Je crois que...に暗に先回りされている。するとJe crois qu'il regrette qu'elle ne soit pas là. が得られ、この文ではJe croisが全体のMODUSであり、qu'il regrette qu'elle ne soit pas là. がDICTUMとなる。(1998, p.37)

バイイはいかなる形態をなした言表であっても、そこには思考主体とその判断が含意されるということを明かした。そうであるなら、あらゆる言表の思考主体は、最終的に各々の言表を発する言表者自身、つまり「私」に帰着するというのが末永によるバイイの第一理論の捉えなおしである。

【II】バイイの第二理論と末永によるその解釈

続いて、バイイの言表行為論の第二理論において提示されている要素を追ってゆき、さらに末永によるその解釈を確認する。バイイは、先程挙げた『一般言語学とフランス言語学』の中で、(さらに補足しておけばmodusとdictumの区

別を行った、同じ第一篇、第一章の最後において)「伝達行為」という名のもと、communicationという要素を提示している。そのcommunicationの要素を説明している部分を以下に引用しよう。

ことばは思考を伝達するのに役立つものなので宣言の手順 (procédé déclaratif) と称される適切な手順により、この本源的性質をしるすものと期待されるにちがいない。そうした手順は存在するが、表面的な検討では目につかない。[⋯] La terre tourneという文が、論理的には « Je vous fais savoir (伝達) que je suis convaincu (様態性) que la terre tourne. » を意味するとしても、こんな二重の重々しい枠組みを負った表現が、ほとんど見あたらないことは、おどろくにあたらない。(LG, p.50)

ここでバイイは、言語活動をコミュニケーション手段とし、あらゆる言表には、modusに先立ってJe vous fais savoirという「宣言」が内在していると主張している。つまり、言語活動とは伝達であり、伝達行為は宣言を伴い、その宣言の主語は「私」以外に無いということだ。

降り返って考えてみよう。末永は、バイイのmodus概念を一人称単数代名詞「私」に収斂するものとして修正した。また、今見たように、バイイの第二理論は、全ての文に先立つ要素の主語が必然的に「私」となることを示している。では、先程末永が修正したバイイの文要素modusと、今確認している文要素communicationとが、どちらも「私」へと帰着するのであれば、この二つの要素の「私」が同じものであるのか、あるいは違うものであるのかという問いが提出できるだろう。そして二つの要素間の「私」が意味論上異なるのであれば、その差異は何であるのかということの説明が求められるだろう。先回りして結論を述べておけば、この二つの要素に見られる「私」は、意味論的に担っている価値が異なっている。どのような差異によってか。この問いに対し、末永は、川本(1985)によるバイイの理論への解釈を受けて説明を行っている。そこで、まず川本の解釈を見ておこう。

発話は常に伝達 [communicationの要素] を意図するものであるから、この部分は恒常要素としてこれ以上取り立てて論じないことにしてもよからうが、〈態度〉のほうは「⋯と信ずる」ばかりでなく、「⋯と疑う」もあり得るし、

「・・・と要求する」とも変わり得る。さらに<事態>に至っては、これはもう千変万化といったのでも全く足りないほどに種々様々である。実に、われわれは大宇宙・小宇宙の森羅万象の無限のかかわり合いについて断定し、質疑し、要望するからである。こうして<伝達>は一つ、<態度>はきわめて少数、<事態>は無限ということになる。(1985, p.116) ([] 内は引用者による)

川本のバイイ解釈では、世界の無限の表象を示す文要素dictumは、それに応じて無限のヴァリエーションを取り、このdictumに対して主体の判断を示す文要素modusは、わずかなヴァリエーションしか持たないとされている。そして重要なのが、文要素communicationとmodusとの差異であるが、このわずかなヴァリエーションしか持たないmodusよりも更に少ない一つだけの形態しか持たないものがcommunicationの要素であると述べられている。この川本による解釈を受け、末永はバイイの理論を次のように説明している。

[modusの「私」には] 複数の動詞の可能性があり、また肯定だけでなく否定におかれる場合もあるだろう。ところが、communicationまで遡ると、主語が必ず「私」であることはもちろん、動詞のヴァリエーションも、vous faire savoir *か*te dire、その他ごく少数に限られてくるだろうし、時制も当然直説法現在、そして肯定以外ない。(1998, p.37) ([] 内は引用者による)

文要素modusに組み込まれている「私」は、その判断に対して、肯定、否定等、が可能であり、それに対して文要素communicationの「私」は、これが取る動詞は肯定以外ないと述べられており、二つの文要素間での差異が示されている。実際、これら二つの要素を否定形に付してみると、この差異が露になる。例えば、文要素modusを肯定形から否定形へ次のように変換してみよう。

(a) Je crois qu'il pleut. → (b) Je ne crois pas qu'il pleuve.
「私は雨が降っていると思う。」 「私は雨が降っていると思わない。」

肯定文(a)から否定文(b)へと変換を行っても、この否定文(b)を理解するのに障壁となるものは何も存在しない。思考主体が何かある対象に対して、それを

肯定的に判断しようと否定的に判断しようとそれはその思考主体に任される。「雨が降っている」と考えようと、そのように考えまいと、そのように判断するのは思考主体の自由である。だが、communicationの要素においてはそうはいかない。なぜなら、誰かが何かの文を言表した瞬間に、その誰かが何かの文を言表したという事実は否定できないものとなるからだ。

ここまですべてを整理しておこう。バイイの第一理論と末永によるその解釈から、言表は文要素modusまで遡ると必ず「私」という記号へと収斂することが了解された。そしてバイイの第二理論から、言表がcommunicationの要素まで遡るとまたもや記号「私」へ収斂することが確認できた。ただし、上でみたように末永の指摘によれば、このcommunicationの「私」は、それが担っている意味論的価値において、modusの「私」とは異なっているということになる。

【III】 communicationの「私」の構造

二つの文要素communicationとmodusに内在する記号「私」の機能の違いだが、modusの「私」は、「複数の動詞の可能性があり、また肯定だけでなく否定におかれる場合もある」のに対して、communicationの「私」は、「時制も当然直説法現在、そして肯定以外ない」。この二つの要素の「私」に加えて、例えば「私は…食べた」という文のように、主体の心的判断を伴わない動詞と組み合わさった「私」、つまりdictumの「私」が認められるだろう⁹⁾。それゆえ、ここまで確認してきたバイイの言表行為理論の末永による解釈から機能的に異なる三つの「私」を認めることが可能だ⁹⁾。そこで、これら三つの「私」がいかなる構造をなしているのかということを検討することが必要となるだろう。ただし、本稿で、重視している観点—つまり、バイイの発想のうちに記号とその使用者との根源的関係を明らかにするためのヒントを見出すという観点—に立った場合、より重要性があるのは、communicationの「私」だと思われる。なぜなら、言表からそれを発する主体の方へと遡った時に、根源的に立ち現れるものとして生じているのがcommunicationの「私」だからだ。そのため、本章では、communicationの「私」の構造を検討することにする。この検討を行うにあたり、II章において参照した末永のバイイ解釈から、文の意味論的構成

要素であるcommunication、modus、dictumを区別するための弁別的特徴を果たしている基準を借用し、それらを用いながら議論を進めることにしたい。

それでは、communicationの「私」の構造を検討してゆくことにしよう。見たように、末永のバイイ解釈によって示されたcommunicationの要素とは、言表を主体の側へ遡って考えたときに根源的に記される「私は…と言う」というものであった。このことを、例文として次に挙げておこう。

(a) Il pleut. 「雨が降っている。」

↓

(b) (Je dis qu') il pleut. 「(私は) 雨が降っている (と言う)。」

ある人物が(a)という言表を行えば、必然的にこの言表(a)は、communicationの要素に先立たれ、(b)の言表へと変換されてしまうことを示している。ただしこの(b)における括弧内は現実には発されていないことにする(これ以後も括弧内に示した言は実際には言表されていないことを示す)。

そこで、このcommunicationの要素「私は…と言う」を明示化し、次のような文(c)を発したと想定してみよう。この時、このcommunicationの要素が明示された言表は、必然的に言表(d)のような構造にならざるを得ない。

(c) Je dis qu'il pleut. 「私は雨が降っていると言う。」

↓

(d) (Je dis que) je dis qu'il pleut. 「(私は) 私は雨が降っていると言う (言う)。」

(c)という言表が発話された時点で、暗黙の内に更にcommunicationの要素「私は…と言う。」が加わってしまい、それを示したものが(d)の言表である。このことから、communicationの要素を明示化し、communicationの要素を言表すれば、それはその時点で次のcommunicationの要素に先立たれてしまっていることが了解される。だから、communicationの要素を言表しようとしても、それは常にその要素に先立たれるという無限後退のような構造をとってしまう。そうだとすれば、純粋なcommunicationの要素は、常に暗黙の内にしか示

されないと考えることが可能であり、そしてこの考えが正しいとすれば、発話されたcommunicationの要素とは何かということが問題となる。そのため、このcommunicationの要素が常に暗黙の内にしか示されないのか否か、検討しておくことが必要となる。そこでこの検討を行うにあたっての基準として、末永によってcommunicationの要素の弁別特徴として挙げられている「(communicationの要素は)肯定以外ない」(1998, p.37)という指摘を用いたい。この基準を軸にして、先ほどの考え (communication要素が暗黙である) の妥当性を検討してゆこう。

まず、この「私は…と言う」というcommunicationの要素が明示化され、そして否定された言表を、dictumの要素を加えて想定してみたい。すると、次のような言表が得られる。

(e) Je ne dis pas qu'il pleut. 「私は雨が降っているとやわない。」

この言表を口に出すこと自体は容易いことであり、また実際の言語使用において、この表現が用いられる可能性はありうると考えられる。この時、この表現 je ne dis pas...を文要素communicationだと認めてしまえば、それは既に、①文要素communicationが暗黙の内に示されるのか、否かという先ほどの問いに否と答えることになり、さらに②弁別特徴をなすものとして採用した「肯定以外ない」という基準に抵触してしまう。なぜなら①については、実際この文要素の明示を認めているからであり、②については、否定が可能となってしまっているからだ。①は事実そうであるなら問題ないが、②に関しては弁別特徴として採用しているため、その特徴の範囲を超えるのであれば、それなりの説明が必要となるだろう。

この説明を試みるにあたり、注目したいのは、この言表されたcommunicationの要素の否定を考えると、その内容において明らかな矛盾が生じてしまうことだ。即ち、

(f) (Je dis que) je ne dis pas qu'il pleut. 「(私は)私は雨が降っているとやわない(と言う)。」

という言表は、「言わない(と言っている)」という矛盾をきたしている。この矛盾を強調することによって、次のように考えることが可能だ。それは文要素communicationの明示化された否定文を言表すれば、それがその言表にさらに先立つcommunicationの要素（あるいはその言表を発しているという事実）と矛盾してしまうことになり、明示化されたcommunicationの要素の否定はそれ自体で考えることができず、成立不可能だとみなすことだ。このように考えることにより、先ほどの②に対して、次のような結論が得られる。否定に置かれたcommunicationの明示は、成立不可能であり、それ故、弁別特徴として採用した末永の定義「肯定以外ない」に抵触しないと。

ただし、このように考えると、まず①無矛盾である肯定形「私は…と言う」という表現をどう捉えるかという問題（これは、communicationの要素が暗黙の内にしか示されないと考えることができ、そしてそうであるならば明示化されたcommunicationの要素は何か、という当初の問題と関わる）、そして次に、②「私は…と言わない」という表現を成立不可能とみなしたところで、実際の言語使用において例文(f)「私は雨が降っていると言わない」というような言表を言いうる可能性については、答えていないことになる。しかもこの表現が言われうることを、認めることからこの議論を始めているので、これに答えないことはそもそもの議論を崩壊させてしまう。そこでこれらの問題に答えるため、今述べた説明とは別の説明が必要とされることが了解されるだろう。

次の説明として、この明示化されたcommunicationを、communicationとしてではなく、他の要素として考えてみることにしてみたい。まずは、明示化されたcommunicationをdictumと考えることから出発してみよう。すると、「私は雨が降っていると言わない」という一文全てでdictumを形成していると考えることが可能である。こう考えるならば、一つ目の説明での問題①の答えがえられる。それは、明示化された文要素communicationはdictumの要素として考えられるため、communicationは常に暗黙の内にしか示されないということだ。ただし、このように考えるとしても、依然、問題②については述べていないことに変わりはない。それ故、この表現をdictumの要素とみなしても、先ほどcommunicationの要素とみなしたところで試みた説明と同じような矛盾が解決されないことがわかるだろう。

では、この明示化された「私は…言う／言わない」という表現をどう位置づければよいだろうか。この表現をcommunicationあるいはdictumの要素と見なした時、乗り越えられない障壁として生じているのは、「私は…と言わない」という表現が、それに先立つ暗黙のcommunicationの要素「私は言う」と矛盾してしまうことだ。これを図式的に示せば：「(私は) 私は…と言わない (と言う)」と記述でき、括弧内の常に肯定形で暗黙のcommunicationの要素＝「言う」と、括弧外の表現「言わない」との対立が解消できないのである。この矛盾を取り払うためには、「私は…と言わない」という表現を「…」(＝dictum)の部分に対する話者の否定のモダリテ＝判断として解釈することが必要なのではないだろうか。つまり、「私は雨が降っていると知らない」という表現の、「私は言わない」を、その外に暗黙の内に了解される「私は言う」に対立させるのではなく、「雨が降っている」というdictumに対する話者の否定の態度として考えるというものだ。このように解釈すると、「私は…と言わない」は、話者のdictumに対する態度あるいは「判断」として、バイイのmodusの定義＝「主体の心的判断」に抵触することなく、modusとして考えることができる。しかも問題①、②を克服することも可能だ。①に関しては、明示あるいは発言された肯定形「私は…と言う」という表現は、modusの要素として考えることが可能であり、②に関しては、否定形「私は…と言わない」という表現は、今述べたように「…」＝dictumに対する否定の態度であると考えることが可能だ。そこで、問題①、②が解決された今、当初の問題に答えることができるだろう。つまり、communicationの要素は、常に暗黙の内にしか示されないと考えることは妥当であり、そして、発言されたcommunicationの要素は、もはやcommunicationの要素とは呼ばず、modusの要素へと変容していると。

そこでcommunicationの要素をまとめておこう。communicationの要素は、常に暗黙の内に示され、その構造としてそれを発した瞬間、さらにその要素に先立たれる、あるいはそれを対象化しようとするれば、無限に後退するという特徴をもった要素であると考えることができる。加えて、発言され、明示化されたcommunicationの要素は、modusの要素へと変化している。

【IV】 結論

以上の考察をつうじて、communicationの「私」の構造が明らかとなった。このことから、今回の目的—パイイの言表行為理論から出発して、「記号」と「記号をもちいる主体」との根源的な関係を明らかにするということが達成されたと考えられるのではないだろうか。

すなわち、「記号を用いる主体」とは、一人称単数代名詞「私」としてしか表わしようの無い言表者のことであり、パイイのタームでのcommunicationの「私」だ。この「私」へと至ることは、論理的に不可能である。communicationの「私」は、その要素「私は…と言う」を言表した瞬間、(私は)「私は…と言う」(と言う)という挙措を自動的にとってしまい、何度この言表を繰り返そうが、この構造は無限に続いてゆく。それ故、この無限後退という構造を逆に考えれば、「私は…言う」というcommunicationの「私」は、「私は…と言う」という言表を行った瞬間、常にそれに潜在的に先立つcommunicationの「私」から遅延された結果として事後的に生成されていると言える。しかも、言表された「私は…言う」の方は、文要素modusへと変容しており、今度は、このmodusの「私」がcommunicationの「私」から遅延された結果として生じている。そしてこのような構造から確認できることは、常に声にならず、沈黙のうちにあるcommunicationの「私」が、言表に対してある意味で、不在として関わっているということだ。つまり、決して声になって現れない「私」は、言表中に不在のものとして、だが同時に言表を発するという行為に根源の力を与えるものとして存在する。言表することによって現存し、かつ言表に組み込まれないことによって不在となる。だから、communicationの「私」は、言表に対して不在にして現存するという関係をなす。ただし、このように考えた場合、言表に対してそれに力を与えるものとしての「私」が一方的に存在するという構図を取ってしまう。この構図を指摘するだけでは、記号とそれを用いる者との関係を十分に表しているとは言い難い。すぐに付け加えなければならないのは、この「私」は言表を行っている瞬間、その言表を生成しそれに力を与えるものでありながら、同時にその言表の結果として生成されているということだ。なぜなら、言表を行わない限り、言表者「私」は、言表者「私」として生成され

ていないからである。「私」と言表せずとも、言表を行えばそこには常に既に暗黙の「私」が不在にして現存し、「私」と言表してもまた、それに先立つ「私」が不在にして現存する。この不在にして現存するcommunicationの「私」の前提条件となっているのが、言表を行うということであり、それゆえ、言表を生成する「私」は、同時に言表の結果として、生成される「私」でもあるのだ。

そこでバイイの言表行為理論の批判的検討から導き出された記号とそれを用いる主体との関係をまとめよう。記号作用である言表とそれを用いる主体「私」は、互いに生成するものでありながら生成されるものであるという相補的な関係をなす。この相補的な生成が行われているその時、「私」は常に言表の外へ逃れ去る不在のものとして、言表と関係していると言うことができるだろう。

しかし、ここまできて次のような疑問が生じる。そもそも「解釈者（記号の使用者）」とは、言表を行うもののことを指すだけであるのか。言葉を発するという行為を行わずに、無言の内独り言を言う（考える）としても、これもまた言葉という記号を解釈（使用）しているのではないか、という疑問だ。この問いに対しては、modusの要素を検討することにより、答えを提示できるのではないかと考えているが、これを行うためには紙幅の都合上、舞台を新たにしてお発ししなければならない。

註

- (1) モリスからの引用にあたっては、*Foundations of the Theory of Signs*をFTSと表記する。
- (2) 引用にあたっては、内田種臣、小林昭世訳、『記号理論の基礎』を参照した。
- (3) バイイからの引用は*Linguistique générale et linguistique française*, 4^e ed.,をLGと表記し、そのページ数を示す。小林英夫訳、1970、『一般言語学とフランス言語学』も参照したが訳は引用者による。
- (4) バイイ「主体の心的判断」（事実判断、価値判断、意志）は、次のように記されている。

「思考とは、表象を認証し、評価し、または欲求しながらそれに反応するこ

とである。したがってそれは、あるものがある、またはないと判断することであり、あるいはそれが望ましい、または望ましくないと評価することであり、あるいは最後にそれがあつた、またはないことを欲することである。ひとは雨が降っていることを<信じる>か、あるいはそれを<信じない>か、あるいはそれを<うたがう>かであり、ひとは雨が降っていることを<悦ぶ>か<悲しむ>かであり、ひとは雨が降ることを、または降らないことを<願う>のである。最初のケースでは、ひとは事実判断を言表し、二番目のケースでは、価値判断を、三番目のケースでは、意志を言表しているのである。最初の操作は悟性に、二番目の操作は感情に、三番目の操作は意志に属している。」(LG, p.35)

- (5) ここで記述されているバイイのdictumは小林訳では「事理」となっており、後に確認する川本(1985)のバイイについての議論では「事態」と訳されてある。「事理、事態」は「事実」よりも大きな概念でありフィクション等の出来事も「事理・事態」には含まれると言える。そのため、バイイの構想したdictumをこのように訳していると思われる。
- (6) 末永からの引用は、論文の出版された年号を示す。
- (7) 川本からの引用は、論文の出版された年号を示す。
- (8) デュクロは、*Dire et ne pas dire*に収録されている論文«*Illocutoire et performatif*»において、バンヴェニストの人称代名詞に対する分析と、オースティンの言語行為論の「遂行文」という概念を用いながら、記号「私」を「私1」、「私2」と、二つに分けることを提案している。この「私1」と「私2」は、それが担う意味論的価値の相違によって隔てられている。デュクロは、この相違の基準を「現在の対話」と関係する「そのものとしての対話者」としての地位が、記号「私」に備わっているかどうかにおいている。デュクロは例として、(1) *Je te promets d'aller à Paris.*と(2) *Je suis allé à Paris après toi.*を挙げており、この(1)、(2)に出現している *je* がそれぞれ「私1」、「私2」に相当すると言う。両例文の主語「私」を三人称代名詞(例えば *il*)に変換した時、意味論上変更をきたすものが「現在の対話」と関係する「私1」であり、変更をきたさないものが「私2」である。例文(1)においては、この文を発話することにより「約束」という行為が交わされるが、この例文の主語 *je* を *il* に変換すると、もはや「約束」という行為を現に遂行しているとは言えず、「彼」が行った約束についての記述となる。これに対し、(2)の例文では、*je* を *il* に変換したとしても、意味論上の変更はないとしている。この例での *je* は過去形と結びついており、「現在の対話」と関係しておらず、それ故、「そのものとしての対話者」に該当しないということだ。ここで我々が挙げた例文「私は…を食べた。」等に該当するものも、「私2」に当てはまる。
- (9) デュクロは、バイイのcommunication、modus、dictumという文の要素について

も、*Logique, Structure, Énonciation* (1989)の中の論文« Énonciation et polyphonie chez Charles Bally »において論じている。デュクロはその中で、潜在的な一人称を想定しておらず、例えば、「Un monsieur fait savoir qu'il désire parler à Madame」という文を« Un monsieur fait savoir (communication) qu'il désire(modalité) parler à Madame »(p.180) というふうに分している。

文献

- 赤羽研三、2000、「デュクロの語用論1」、『防衛大学校紀要 人文科学分冊』、第八十輯、横須賀、防衛大学校。
- Austin, John Langshaw, 1962, *How to Do Things with Words*, Oxford University Press.
Traduction française par Gilles Lane, *Quand dire, c'est faire*, Paris, Seuil, 1970.
- J. L. オースティン著、坂本百大訳、1978、『言語と行為』、東京、大修館書店。
- Bally, Charles, 1965, *Linguistique générale et linguistique française*, 4^e ed., Bern, Franche Verlag.
- C. バイイ著、小林英夫訳、1970、『一般言語学とフランス言語学』、東京、岩波書店。
1974、『言語活動と生活』、東京、岩波書店。
- Benveniste, Emile, 1966, *Problèmes de linguistique générale*, tomeI, Paris, Gallimard.
1974, *Problèmes de linguistique générale*, tomeII, Paris, Gallimard.
- Ducrot, Oswald et Jean-Marie Schaeffer, 1995, *Nouveau Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Seuil.
- Ducrot, Oswald, 1972, *Dire et ne pas dire*, Paris, Hermann.
1984, *Le dire et le dit*, Paris, Minuit.
1989, *Logique, Structure, Énonciation*, Paris, Minuit.
- Derrida, Jacques, 1967, *La voix et le phénomène*, Presses Universitaires de France.
- ジャック・デリダ著、高橋允昭訳、1970、『声と現象—フッサール現象学における記号の問題への序論』、理想社
- Dubois, Jean et al, *Dictionnaire de linguistique*, 1973, Larousse
- デュボア他著、伊藤・木下・福井・丸山他編訳、1980、『ラルース言語学用語辞典』、東京、大修館書店。
- Durrer, Sylvie, 1998, *Introduction à la linguistique de Charles Bally*, Paris, Delachaux et Niestlé.
- Grice, H. P. , 1989, *Studies in the Way of Words*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- ポール・グライス著、清家邦彦訳、1998、『論理と会話』、東京、勁草書房。
- エルマー・ホーレンシュタイン、高田珠樹訳、1985、「「私」という語の特異な文法」、『思想』10号、東京、岩波書店。

- 川本茂雄著、1975、「フランス語学・一般言語学・国語学」、『言語』4巻10号、大修館書店、pp.64-71。『言語の構造 フランス語そのほか』、東京、白水社、1985所収、pp113-122。
- Moeschler, Jacques et Anne Reboul, 1994, *Dictionnaire encyclopédique pragmatique*, Paris, Seuil.
- Morris, Charles William, 1938, *Foundations of the Theory of Signs*, Foundations of the Unity of Science, Vol.1, University of Chicago Press.
- Ch・W・モリス、内田種臣、小林昭世訳、1988、『記号理論の基礎』、東京、勁草書房。
- Récanati, François, 1979, *La Transparence et l'énonciation*, Paris, Seuil.
- 1980, « Qu'est-ce qu'un acte locutionnaire ? », *Communications*, n° 32, Paris, Seuil.
- フランソワ・レカナティ、菅野盾樹訳、1982、『ことばの運命』、東京、新曜社。
- Roulet, Eddy, 1980, « Modalité et illocution », *Communications*, n° 32, Paris, Seuil.
- Saussure, Ferdinand de, 1916, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Séchehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger, Lausanne Paris, Payot.
- フェルディナン・ド・ソシュール、小林英夫訳、1972、『一般言語学講義』、東京、岩波書店。
- Searle, John R, 1969, *Speech Acts : An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge, Cambridge University Press. Traduction française, *Les actes de langage : Essai de philosophie du langage*, Paris, Hermann, 1972.
- J・R・サール、坂本百大他訳、1986、『言語行為』、東京、勁草書房。
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. B. Blackwell, 1986, *Relevance : Communication and Cognition*. Oxford : Blackwell. Traduction française par Abel Gerschenfeld et Dan Sperber, *La pertinence : communication et cognition*, Minuit, 1989.
- スベルベル、ウィルソン著、内田聖二他訳、1993、『関連性理論－伝達と認知』、東京、研究社。
- 末永朱胤、1997a、「言語のペルソナ－ソシュールの言語概念とバンヴェニストのディスクール論－」、『中大仏文研究』第29号、東京、中大仏文研究会。
- 1997b、「言語（ラング）の地平線－ソシュールとバンヴェニスト－」『フィロロギー』no.7, 仙台、現代言語論研究会。
- 1998、「遂行的なものとしてのラング－ソシュールの言語概念再考－」、『フランス語、フランス文学研究』、東京、日本仏語仏文学会。
- 高原脩他著、2002、『プラグマティックスの展開』、東京、勁草書房。